

動脈硬化の定量化と自己管理

健康館鈴木クリニック検査課

〇秋元崇史 鶴殿美根子 田中稔保

山田章代 久保田友美 鈴木則子

鈴木和郎

[目的]

周知のとおり、心血管系疾患は我が国の死亡率の約3割をしめるとともに、要介護の主要因であることから、今や動脈硬化の早期発見、維持、改善は、国民一人ひとりの健康維持、増進、QOL向上に不可欠な課題といえる。すなわち当院においては本年9月より、動脈硬化を自己管理の対象に置くべきエビデンスの一つとして、動脈壁の硬化度合を定量化(AVI: Arterial Velocity puIs Index)し、健診受診者に提供している。そこで得た知見を報告する。

[対象]

2012年9月1日から当院で健診を受診した75名を対象とした。

[方法]

服派血圧計(Pasesa)により、理論上の中心動脈圧を測定することによる動脈硬化指数(AVI)が自動算出される。AVIから血管年齢を導きだし、そこから実年齢を差し引いて得られた正の値を実質動脈硬化度として、その出現率についてAVI-cut off値を25とした時の有意差について検定した。

[結果]

AVI値25以上の場合において、実質動脈硬化度の出現率(80%)は、AVI値目以下の場合の出現率(7.7%)に対して有意に高かった。

[考察]

動脈硬化度の増大は、心血管疾患の独立した危険因子としてとらえることができる。よって、健診受診者において、AVIが25以上の者については、動脈硬化が実質的に進んでいる可能性が高く、目的に見合う自己管理への啓発が重要になるとと思われる。